

令和 4 年度

事業所名 : グループホーム すまいる

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0390200111		
法人名	医療法人仁泉会		
事業所名	グループホーム すまいる		
所在地	〒027-0096岩手県宮古市崎嶽ヶ崎9-39-34		
自己評価作成日	令和4年11月19日	評価結果市町村受理日	令和5年1月10日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

穏やかに心地よく生活して頂けるよう、認知症の利用者様を主体とした・安全・安心できる暮らしを第一に考えケアしています。  
ADL低下により、介護度が重度化しても、住み慣れたホームに居たいと希望がある限り、できるだけ介護技術や知識を活かし、ニーズに沿ったサービスを継続しています。  
認知症サポーター養成講座や介護カフェの企画・開催等力を入れているが、コロナ禍で計画より少ない開催となっている。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 [https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action\\_kouhyou](https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou)

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開設当初からの理念である「共に生き、共に笑い、助け合い・・・地域社会の一員であることを感じて」の考え方を大切にし、職員は利用者の思いを感じ取り実現することに力を入れ、これまで生活してきた歩みを大切にする取り組みを行っている。コロナ禍で家族との面会ができない状況が続いている中で、LINEを活用したウェブ面会は家族から好評を得ている。また、重度化した場合でも、なるべく住み慣れた環境で過ごしていただけるようギリギリまで介護を継続する努力も重ねている。コロナ禍以降、地域との交流が思うように取り組めていないとしているが、地域社会の一員であり続ける意欲を高く持ち、地域子ども達との花火を楽しんだり、地域の小学校で認知症サポーター講座の出前授業を行い、認知症の方への理解を深める啓発活動にも積極的に取り組んでいる。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和4年12月6日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印		
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

事業所名 : グループホーム すまいる

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	ホームの目標に沿って個人目標を設定し、上半期と下半期に分け、理念に沿って取り組んでいる。	事業所開設当初からの理念を継続している。見直しの意見もあるが、職員は今の理念を大切に、特に「地域社会の一員」という思いを強く持っている。毎月の職員勉強会では理念についての話し合いも行っている。職員は個々に具体的な目標を設定し、理念に併せて事務室に掲示している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍で、地域のイベント等参加していないが、なじみのスーパーやかかりつけ医を大切にしている。近所の散歩やドライブで知人に会う事もある。	コロナ禍にあって地域との交流機会が少なくなってきたが、自治会員として職員が清掃活動に参加している。夏には密にならないよう配慮しながら、地域の子供達と花火を楽しんでいる。管理者は地域の小学校で認知症サポーター講座の出前授業を行い、地域への認知症の方への理解を深める啓発活動に積極的に取り組んでいる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	介護カフェや認知症サポーター養成講座の講義依頼があり、積極的に参加し、発信している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度は、2回開催できたが、コロナ禍で開催できなかった回の資料を送付し、開催できた回で報告した。話しやすい雰囲気を中心掛り、様々なご意見を頂いている。	書面開催が多くなっているが、11月には久々に集合開催ができた。委員は中学校校長や、近隣住民、民生委員、地域包括支援センター職員等で構成され、事業所の応援団として様々な意見を貰っている。委員からタブレット等を使って子ども達の合唱を利用者に見せたらどうかとの提案もある。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	集団指導や市が主催の研修会等積極的に参加している。運営推進会議の日程調節や生活保護の利用者に関することなど直接市役所へ出向き、顔なじみになっている。	市から運営推進会議に出席しているほか、市や地域包括支援センターが主催する地域ケア会議には、事業所からも参加して連携を深めている。日常的に地域の課題や入居相談を行うなど、介護担当課と良好な関係を保っている。なお、生活保護受給の方がいるが、ケースワーカーの来訪が無いことが気にかかっている。	

事業所名 : グループホーム すまいる

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	グループ内の老健でYouTubeでの研修や、ホーム内での勉強会でも毎年勉強会をしている。身体拘束はゼロを継続しているが、見えない拘束（スピーチロック）はないか、常に意識している。	法人全体の身体拘束適正化委員会が2ヵ月毎に開催され、事業所からホーム長が出席している。職員会議での研修や事例検討などを通じ、職員の意識を高めている。まだスピーチロックが散見され、管理者はその場で言い直しを考えつつ注意している。センサーマットの使用者はいない。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束適正委員会を2ヵ月に1回開催し、虐待についても、老健等他部署と話し合っている。利用者様が、安心・安楽に過ごせるよう、虐待防止に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	高齢者権利擁護推進員養成研修を修了した職員が2名いる為、毎年、勉強会の中で伝講している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	ご利用前にご自宅またはホームを見学して頂き、契約書を分かりやすい言葉で十分な説明を心掛けている。わからないことなどあれば、いつでも話しやすい関係を意識している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者様の要望や願いは申し送りノートに記入し全職員で共有している。ご家族様からの要望も同様で、出来る限り応えている。	家族には月1回お便りを送り、利用者の様子をお知らせしている。面会制限が長期化しているため、LINEを活用したウェブ面会を行うようにしたところ、利用者・家族から喜ばれている。利用者は、食べたいもの、行きたい場所に関する希望が多くなっており、なるべく希望に沿えるよう対応している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	気づいたことなど気軽に書き込み、全職員が毎朝確認する申し送りノートがある。また、大きな業務改善などは月1回の業務会議内で意見交換できる。	日常的に職員間での交流があり、よりよい関係性が構築されている。個々の職員の気付きや提案を申し送りノートに書き込んだり、会議の際に提案して改善に繋げており、例えば、ゴミ箱の位置について、ゴミ箱利用時の動線が食事をしている人の前を通っていたため変更した例もある。職員の気付きで暮らしやすい環境づくりが行われている。	

事業所名 : グループホーム すまいる

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	最低でも年に2回個人面談があり、設定した個人目標が達成できるよう進捗状況を確認、共有・協力している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内外の研修にそれぞれ必要な対象者を選別、または希望者を積極的に参加できている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域包括支援センター主催の地区会議やホーム長のグループLINEで気軽にそうだんしたり、沿岸北ブロックの交流もある。		
<b>II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	相談・見学・訪問調査時に、ご本人・ご家族の相談や悩み事など、ゆっくりと話しやすいよう時間をかけてお伺いしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	相談いただいたことに対し、一緒に解決できるよう、ホームで情報を共有し、応えている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	他のサービスを利用していた際は、その事業所での生活の様子を見学に行き、職員に様子を伺う。なじみの生活が継続できるよう、支援している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	調理・洗濯・掃除等、生活に必要な家事を一緒に行き、貸し借りのバランスを考え、暮らしている。		

事業所名 : グループホーム すまいる

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	Web面会やLINEで写真を送ったり、受診の対応をお願いする事もある為、共に支え合っている関係を築けている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	住み慣れた地域へドライブに出かけ、近所の方々と会い、懐かしみながらコミュニケーションをとる機会がある。	コロナ禍のため知人等の来訪はなくなっている。実家の様子を見たいという希望もあり、その場合は職員と一緒に出かけ、近所の知人とも会えたりしている。事業所として、馴染みの関係が途切れないよう支援している。通院の際に家族が付添い、自宅に寄ったり馴染みのラーメン店に寄る方もいる。理容については、訪問理容を利用しており新たな馴染みとなっている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	相性を考えた食席と居室を配置し、職員が会話の橋渡しする事で共に楽しく生活する事が出来ている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院が長引いたり、医療行為が必要となり、退居する事が多いが、医療連携や他事業所のケアマネなど連携し、退院後のフォローしている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入浴中や、就寝時等1対1になる時間は特に大切にし、希望や意向をさりげなく伺っている。	利用者がこれまで生活してきた歩みを大切にする取り組みを行っており、ゆったりとした雰囲気の中で、昔の写真を見ながら当時の思い出話を聴いている。意思表示が難しい利用者でも、職員が1対1で時間をかけて向き合えば、思いを聞き出すことが出来るとしている。気持ちが不安定になる時間(起床時、夕方等)がある方には、その不安要素を知り、解決策を見つけ、皆で共有して、安心して暮らせるよう支援している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご家族・近所の方や以前利用していたサービスの事業者へ伺って、情報収集している		

令和 4 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム すまいる

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	馴染みの生活を意識し、残存機能を活かした生活をお手伝いする事で継続できるよう努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月カンファレンスで担当が評価したもので会議を進め、出席者全員の意見をケアプランへ反映させている。ご家族には電話や手紙等で近況や、ケアプランについてお話させて頂く。	入所当初は暫定プランとし、概ね3か月後には居室担当職員の意見をもとにケアマネがプラン原案を作成し、職員カンファレンスにおいて正式決定している。モニタリングは主としてケアマネが行っており、これをもとにしてプランの見直しを概ね3か月毎に行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	申し送りノートやほのぼのソフトを活用し、職員は出勤時退勤時必ず確認・記録している。ノートの中で提案し、実践する事もある。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	必要時には他事業所と連携し、情報収集している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	自治会や公民館の行事など中止が相次いでいる。ホーム玄関から、学校や幼稚園に行く子供たちに手を振り見守りをしたり、実習生を受け入れている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	一つの医療機関にかかれば負担は減るが、馴染みの信頼できるかかりつけ医を大切に継続している。急変時は訪問看護と連携し、24時間相談できる。	入居前からの関係性を大切にするため、従前からのかかりつけ医に継続して受診しており、宮古市内の精神科病院や診療所に通院している。半数の方は家族が通院に付き添っている。看護業務は同法人内の訪問看護サービスを利用し、急変時の対応も可能となっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	定期訪問が週に1回あり、24時間365日何かあれば電話相談や駆けつけてもらっている。		

事業所名 : グループホーム すまいる

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院時は迅速に介護サマリーを作成し、病棟の看護師に直接、口頭で説明を交え手渡している。退院時は、医療連携室と調整を行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	訪問診療を行っている医療機関がなく、看取りの実績はないが、重度化しても、ご本人・ご家族の希望に沿って、出来る限り慣れ親しんだホームで生活できるよう支援している。医療ケアが必要になった場合は、同グループの老健と協力体制がとれている。	訪問診療対応の医療機関がないことから、事業所内での看取りまでには至っていないが、重度化の研修を行うなど、利用者が住み慣れた環境でギリギリまで生活できるよう取り組んでいる。遠方に住む家族が最期を看取りたいと希望し、事業所を退居して自宅で家族との生活に切り替えた後も、利用者への対応を電話等でアドバイスし、最期を自宅で過ごすことが出来た例もある。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	手に届く位置に、マニュアルがあり、ケースによって予測される急変時の対応は想定し、共有している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回消防訓練を実施。ガスコンロでの調理や非常食の備蓄を確認している。地域の方の協力体制はあるが、コロナ禍で、不参加が続いている。	年に2回、火災想定避難訓練を行っている。6月は夜間想定で、11月は日中想定訓練だった。地域内には避難時の協力を4人の方をお願いしているが、コロナ禍のために今は訓練に参加できていない。食糧の備蓄は4日程度あり発電機やガスコンロ等も備えている。	夜間想定訓練の実施時期は、晩秋の薄暮時間等に実施すると、夕方でも暗さが実感できることから、日中と夜間での危険個所の相違や避難までに要する時間、必要な物品などを確認出来、より実践的な訓練になると思われる。協力者の参加も得て訓練を積み重ねられることを期待したい。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	ホームで決められた時間にとらわれず、一人でお部屋で過ごしたり、玄関で日光浴など、自由に過ごして頂いている。入浴や排泄も1対1でプライバシーに配慮している。	個人個人の思いを活かして、なるべく好きなように過ごせるよう支援している。利用者は、編み物や文章書き、学習療法など、様々なことを行っており、それぞれの活動の中から「得意を引き出す」ように努めている。プライバシーを確保するため、例えば、入浴時の着脱や体洗いなどの一連の動作を一人の職員が行い、1対1で行うケアを大切にしている。	

令和 4 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム すまいる

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の自己決定が難しい時は選択肢をヒントに導き出すこともある。利用者本位になるよう日頃から働きかけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	学習療法や家事作業など職員が声掛けするが、利用者の状況や気持ちを優先し、無理強いはいしない。対応次第で利用者様の気持ちが変わる事もある。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	起床時、洗顔整髪、男性は髭剃りをして頂く(または介助)着替えの際は、ご自身で着たい服を選んでいただく。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	献立を考える際、利用者に食べたいものを聞くなど希望に沿ったメニューを考えている。調理や皿洗い・皿拭き等一緒に片づけている。	栄養バランスを考えながら一日30品目を取り入れるよう心掛けている。年に数回、管理栄養士に献立のチェックをしてもらっている。献立は職員が交替で2、3日前に考え、調理も職員が行っている。利用者の希望を聞いて、なるべくメニューに反映するようにしている。利用者は野菜洗いや食器拭きなどを手伝っている。ご近所の方や家族から野菜等の差入れがあり、漁師の方からは烏賊を頂くこともある。お正月などの行事食に必ず入れる郷土食は、利用者に喜ばれている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	1日30品目を目標に季節の野菜を取り入れている。食事摂取量や水分摂取量が分かるよう記録し、夜間に1日のトータル計算し、摂取量が不足している場合、申し送って気を配っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	月に1回グループ内の老健から歯科衛生士が口腔ケア指導にきて、チェックし助言頂いている。舌苔や歯ぐきなども見てもらい、個々の口腔ケアをしている。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	立ち上がりが困難でも、尿意がある限り、介護技術を駆使し、トイレでの排泄を行っている。定時のトイレ誘導にとらわれず、個々のタイミングを観察し、介助・声掛けしている。	排泄チェック表で個々の排泄パターンを確認し、適時の声掛け誘導を行っている。誘導時には小声で話しかけるなど、プライバシーに配慮している。利用者は全体的に身体機能が落ちてきているが、出来る限りトイレでの排泄を支援している。入居前は失敗が多かった方も、トイレでの排泄が行えるようになってきている。機能が落ちないように、現状の改善又は維持に向け、引き続き支援していきたいとしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘は下剤ととられず、安心できるトイレ環境か、姿勢は正しいか、マッサージや水分摂取量、食事など原因を探る工夫をしている。最終的に下剤調整することもある。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	熱い湯がいい方、シャワーだけでいい、最初に入りたい、今日は気分じゃないなど希望に沿った入浴を提供している。	週に3回の入浴が行えるよう取り組んでいる。職員と1対1になれる大切な時間であり、関りを大切に一人の職員で最初から最後まで入浴の対応を行っている。入浴を嫌がる場合は、声掛けの工夫などにより促している。職員は背中やシャンプーなどを主にケアしている。利用者は、季節を感じられる菖蒲湯やゆず湯も楽しんでる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	消灯時間の目安はあるが、基本的にはお好きな時に休んでいただく。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の説明書の最新のを直ぐ確認できるようファイルしている。減薬や変更あった際は、リアルタイムで申し送りノートに記入し、共有し経過観察している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	ご家族や利用者の情報から興味のあるものを試していく事で、編み物や縄を編む、外食やドライブなど個々に支援している。		

事業所名 : グループホーム すまいる

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。 又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	中華そばが食べたい、ソフトクリームが食べたい、海が見たいなど急な希望があっても、ホームの業務に支障がない限り、職員がフォローし合い、希望に沿って支援している。	日常的に近所の散歩を行っており、コンビニやお餅屋さんに立寄ってお団子などを買ってくることもある。利用者から行きたい場所の話があったら、なるべく叶えるようにしている。お花見等でドライブしたり、藤原ふ頭に寄港した客船見物に出かけたこともある。コロナ禍で制限があるものの、可能な限り外出できるよう支援を行っている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ホームで立替え、物品購入できるが、利用者自身がいくらか持っていたいという方もおり、個人管理している。買い物の希望があれば付き添う。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援している	月に一度はご家族宛に写真付きのお手紙を出している。ご家族と話したいと希望があれば支援する。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	天窓から自然の光が入り、ワンフロアで全体が見渡せる。食席から台所が見えるため、音や匂いで食事の楽しみを味わうことができる。畑で野菜を育て収穫している。	ホールには天窓からも日差しが入り、明るく清潔感がある。壁面にはクリスマスなどの季節を感じる飾り付けがなされている。日中はホールで思い思いの時間を過ごしている方が多いので、落ち着ける雰囲気を醸し出すことに気を付けている。温度や湿度はエアコンや床暖房、加湿器で適温に保たれている。利用者は気の合う人同士で集まって洗濯たたみを手伝ったり、テレビを見たりして、ゆったりと過ごしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	3人用ソファが3つあり、食席のほかにTVの側や日光浴の出来る玄関など、お好きな場所で過ごすことができる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者が自宅で使っていた布団や家具を持ってきていただいている。家族写真を飾っている方もいる。	居室には、ベッドと洗面台、クローゼット、小タンスが備付けられ、室温はエアコンと床暖房で管理されている。利用者は、馴染みのタンスや家族写真などを持ち込み、壁には塗り絵などの作品や誕生日カード等を貼り付け、居心地良い空間となっている。	

令和 4 年度

## 2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム すまいる

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	自宅のお部屋を見せて頂き、配置を再現できる場合は近づけている。 トイレや自室がわかるよう、利用者目線に案内や表札を配置している。		